

特集

〳〵三人称〳〵を呼び覚ませ

●「NPO法人きぼうのいえ」理事長

山本雅基

(やまもと・まさき)

彼は「もう一人の自分」だから



孤独死も餓死も、ひいては年々増えていく自殺も、その背景には、人や社会との関わり方の変化と喪失を抱えている。しかし一方で、「見ず知らずの他人」に寄り添い続けている人たちもいる。

今から十年前、山本雅基氏は、日雇い労働者が暮らすドヤ街、東京・山谷地区の中心地に、在宅型ホスピス「きぼうのいえ」を立ち上げた。「きぼうのいえ」では、余命に限りのある、身寄りがない、行き場を失った人たちを受け入れている。

山本氏が「ここは死に向かって、自分の命を生き直す場所なんです」と語るように、散々スタッフに怒声を浴びせていた入居者が、いつの間にかスタッフを思いやっていたり、猜疑心の塊だったような人が「すべての人に感謝です!」と言いながら亡くなっていく。そこにはケアをする側、される側、という関係性はない。少なくとも山本氏にとって入居者の存在は、「もう一人の自分」なのだ。

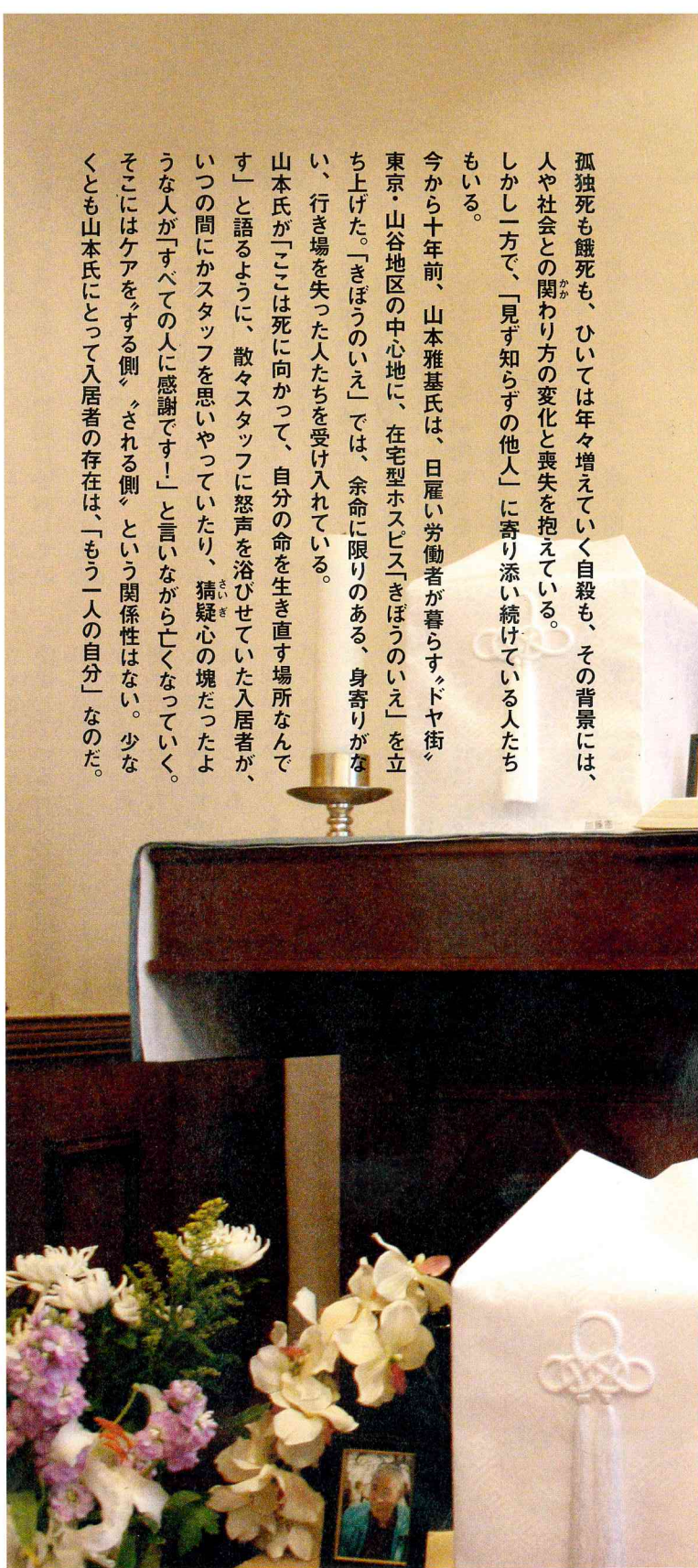
「聴くこと」から始まる フラットな人間同士の交流

「きぼうのいえ」は、病院などの施設に付随する施設ホスピスではなく、身寄りのない人や行き場のない人たちを在宅でケアする、在宅ホスピスです。Cureが治療を意味するのに対し、Cure（ケア）にはいくつかの意味が含まれています。

僕なりに表現すると、「配慮」になります。「きぼうのいえ」は配慮の極点を目指している。それは、「あなたの人生とともに歩いているよ」「いつも見守っているよ」というメッセージを常に発信し続けるということでもあります。

ここに入居する人は、家族との縁を切ってしまった人、犯罪に手を染めてしまった人など、病気以外にも深刻な事情を抱えています。他人や世間を恨み、猜疑

心のかげのような人たちが多く。だから、生半可な気持ちで「慰めよう」と近づこうものなら、完膚なきまでに裏切られます。むしろ、こちらの弱い部分を攻撃される。「そんな浅はかで独りよがりの善意なんて俺が蹴り倒してやる」といった勢いがある人たちです。彼らはある意味闘って生きてきたわけで、相手のどこをどう突けば倒せるかを心得ているのです。恵まれた環境に育っていれば、愛



情の受け方や出し方が身に付き、自分の存在も見出せるようになるでしょう。しかし彼らは、相手を倒せるという攻撃的な方向でしか自分の存在を見出すことができずに生きてきた。そういう勝負をやってきた人たちと真っ向から向かい合うには、こちらにも覚悟が必要なんです。

メッセージを伝えるために僕たちが大切に行っているのは、「聴く」こと。学問的に言えばナラティブセラピーですね。ナラティブセラピーは「聴くからこそ語られる物語がある」という意味で、物語を聴くことでその人の物語に参画していく。つまり、聴くことを通してその人の人生に関わっていくのです。

最初は見ず知らずの他人だから、例えばお薬を渡せば、「どこの製薬会社から金を貰ったんだ！」と言われたり、このお薬を飲むと肝臓が良くなるよと伝えると、「俺の内臓を売る気だろう」なんて凄まじられる。そんな中でも、彼の部屋のゴミを片づけ、目の前で洗濯物を畳んで箆笥に綺麗にしまつてあげるといった日常を繰り返すうちにポロツと、「俺もさあ、いろんなことがあってよ」と過去が語られ始めるのです。辛く悲しい話が語られれば、一緒に泣いてしまうこともあります。人は、自分の人生を語り、自己開示す

ることによって安心するのだと思います。「この人は俺のことを否定しない、受容してくれている」という安心感から相手への信頼が生まれると同時に、自分自身の人生と和解をしていきます。スタッフはその和解を手伝いながら、入居者の人生に自分を投入する。やがては、あなたの痛みは私の痛み、あなたの悲しみは私の悲しみ、あなたの喜びは私の喜びと、互いの溝が埋まっていく。ここではそうしたプロセスをとっても大事にしています。一方的に語られるのではなく、交流しているわけです。最終的には、「俺が死んだらさ、骨拾ってくれよなあ」「わかってるよ」というような、普通の人間関係だったら大っぴらには口にしない二人の深い関係性が、言葉にも行動にも表れるようになる。

僕がスタッフを見ていて面白いなあと思ったのは、誰のものか分からなくなつてしまった洗濯物に顔をつけて、スーッと匂いをかいだんです。で、「やつぱり○○さんのだ」と。家庭でやることでですよ、ね、これは。傍から見たらケアをする側、される側、だけれども、スタッフと入居者は家族みたいなものなんです。家族との間には、ケアをする側、される側、というセンスはありません。母

親、子どもと立ち位置の違いはあるけれども、介抱してあげるではなく、フラットな横並びの人間同士なはずです。

だから、入居したばかりの人がスタッフに「何だくそババア！」と言うと、スタッフも頭にきて、「何だくそジジイ！」って言い返す（笑）。無茶苦茶でも言い合えるだけいいと思うんです。関係性を繋いでいくスタートラインに立ったというところでもありますね。

「きぼうのいえ」は組織ではなく、たとえ擬似的であっても家族だと僕は考えています。うちに来る人たちの多くは、父親はギャンブルに狂い、母親が別の男に走ったせいで親戚中をたらい回しにされた、といった不幸な生い立ちを背負っています。本当の家族を生きられなかった人たちが、僕を含めスタッフと一緒に家族をやり直す、新しい命として生き直す場としてここはある。僕が山谷に建てた「きぼうのいえ」は、誰でもどこからでもやり直せる家なのです。

武装解除を促すのは 笑い&スペシャルフレンド

僕らは「老舗ホスピス旅館」をやっているのであって、チエーン展開するとい



山本 雅基 やまもと・まさき

「NPO法人 きぼうのいえ」理事長。1963年（昭和38）、東京都生まれ。85年に起きた日航機墜落事故のニュースをきっかけに聖職者を志し、95年、上智大学神学部を卒業。その後、小児がんと闘う子どもたちと家族のための宿泊施設を運営する「NPO法人ファミリーハウス」の事務局長を務める。2001年、ホームレスのためのホスピスを建てるべく活動を開始する。02年4月、日雇い労働者の町として知られる東京・台東区の日谷地区に、緊急一時保護施設「なかよしハウス」を開設。同年10月、在宅ホスピス対応集合住宅「きぼうのいえ」を開設。「きぼうのいえ」は、山田洋次監督の映画『おとうと』に登場するホスピスのモデルにもなっている。

谷に来た当初、僕はこの辺のおじさ
のでしよう。

谷に来た当初、僕はこの辺のおじさ
のでしよう。

う発想がありません。ですから決まりきった役割分担やルールがありません。自分で考え、自分で動き、自分で判断し、危機管理もできる人じゃないとやっていけない。病院のボランティアであれば、カウンセリング概論を学んだ人や傾聴の訓練を受けた人が求められますが、うちではそういう経歴はあくまで参考程度。絵に描いた餅^{もち}くらいに僕は思っています。なんちゃってボランティアも採用しません。

なにせうちでは入居者から「お前なん

か死んでしまえ」などと言われることもあるわけで、そんなときに資格は役に立ちませんし、いちいち相手の攻撃にめげてはいられません。うちのスタッフはみんな強いですよ。

例えば、「自殺しろ！」と言われたら、「自殺は自分で死ぬから自殺なんです。あなたに言われて死ぬんじゃない自殺になりませんから死にません！」と攻撃をかわす。「おっぱい触らせろ！」は、「今日おっぱい家に置いてきちゃった」なんて言っ

相手も何を言えばいいか分からなくて黙らざるを得なくなる。対応戦術でこっちの勝ちというわけです。

そのうち向こうも武装解除するんです。いちばん面白かったのは、さんざん暴言を吐いていた人が言った、「怒るのはもうやめました。人を恫喝^{どうかく}したり怒るのは疲れるんです。人に優しくしていたほうが楽です」というセリフ。彼は本当に優しくなったんですよ、死ぬまでずっと。毒をもつて毒を制するんじゃないくて、包み込むような愛の強さで、毒は中和できるといことです。



んたちが醸し出す怨嗟えんさの空気に負けそうになっていました。そもそも自分が弱い人間だというのは分かっていたけれども、より一層自分のなよなよしたところが嫌になってしまい、ある人に相談したんです。すると、「なに気弱なこと言ってんだ。そういうものを避けて通るんじゃないくて、うちの中に入れて綺麗にして出してやる！ というくらいの気迫がなくてどうする」と言われました。ハッと目の覚めるような感じがしました。そうか、相手の前に壁のように立ちはだからのではなく、合気道のように、相手の力を吸収して投げちゃえばいいんだって。考えてみればうちのスタッフも合気道スタイルですね。「ここはきぼうのいえでもなんでもない！ 失望のいえだ！」なんて言いながら事務所に怒鳴り込んでくる人に、「絶望じゃないだけマシね」と返すことで、「言うねーあんたも」と笑いが生まれる。相手の怒りを笑いに変えて投げ返すんですよ。面白いでしょ？

施設ではこういう言い合いはできません。また、公平、公正、平等なサービスが重視される。僕は、単なる平等は悪平等であって、本当の平等じゃないと考えています。だからみんなには、「なれる人は、今度来る人のスペシャルフレンド

になってください」と話しています。「気が合わない人は部屋に行かなくていいです」とも。のっけから公平、公正、平等を無視しています。でも大丈夫、向こうだって選んでいますから。「こいつは気に入らない」「うざったい」とか、逆に「この子はいいなあ」というサインを出しているんですよ。こちらがサインを受け取って、「この人感じがいいわ」となる。このサインのやり取りがスペシャルフレンドの始まりです。誰も近寄らなくなってしまう人がいる場合には、うちのソーシャルワーカーが中和剤として入ってきます。

仲良くなることで初めて、本当のターミナルケアになる。明日あたりが山かなあという人がいると、仲のいいスタッフが、「今日は○○さんの部屋に泊まってもいいですか?」と言ってきたりします。部屋をのぞいてみると、一緒にお布団に入っていたりするわけです。病院でこんなことをしたら大変な騒ぎになってしまいますよね(笑)。でもこの行動は、「ただあなたといたいからいる」という、お金も名誉も何の介在もない、人間同士の付き合いの姿だと思う。僕は、それをやらずに何が「きぼうのいえ」だ!? くらい気持ちでいるんです。

全員が命に向き合う 「きぼうのいえ」の看取り

僕たちは「きぼうのいえ」を立ち上げてから十年の間に、百三十五人の人々を看取ってきました。「親しくなってしまうと、相手が亡くなったときに辛いんですか?」と聞かれることがあります。最も親しい関係にあったスタッフはそりゃあ悲しみます。でも、悲しみに沈んでバーンアウトしてしまう人は一人もいま



せん。

先ほど、スタッフには入居者の命に向かい合う姿勢があると言いましたけれど、言い換えればそれは、死は決して閉塞的に閉じられていくものではなく、新しい方向へのひらきなんだという死生観を持っていることなんです。嘆き悲しむスタッフの傍らで別のスタッフが、「うちに来てくれてありがとう」「よく頑張ったね、おめでとさん」と言っている。死を悼む気持ちと、感謝や旅立ちを祝福する気持ちという、アンビバレンツなバランスが取れているような状態ですが、それがうちの屋台骨でもあります。

死んでしまうと、言葉も発さず、体も冷たくなり、最後には焼かれて骨だけが残る。これが死の実相かと思うと、何だかガクツと力が抜けてしまいます。死が命の終了であるならば、僕らも、病院の医者や看護師も、たんぱく質という名前を持った有機化合物の最終処理場の人間ですよ。もしそんな哲学しか持てないのなら、むなしくてやっていられませんか。僕は、唯物論ではない死生観を持たなければならぬと思っています。現代人は、見えないものを信じないことに慣れ過ぎて、感性が鈍ってしまったのでしょうか。けれど、焼け残った骨がその人の実体なの

か？ と考えると、そうじゃないだろうと。あくまで抜け殻であって、彼自身は新しい世界に向かっていったんだと感じるわけです。

ある信仰の書には「その人の眼が肉の死によって閉じられるとき、魂の眼は開かれて明るい光を見る」という言葉があります。僕は命ってそういうものだろうと捉えています。自分の目の前を去っていくことは悲しいけれど、その人自身は明るい光を見ているはず。だったら僕らはエールを送りたい。「きぼうのいえ」の看取りは、余命を宣告されている入居者だけが死と向き合うんじゃないくて、スタッフ全員で向き合い、人間の命の謎に取り組むことでもあるのです。

僕が看取った人の中に、こんな人がいました。中野さんという末期の肺がんの方で、かつては創作料理店の料理人でしたが、最終的にはホームレスになり、病院を経てうちに来ました。当初は、ここでの生活に対して否定的で心を開いてくれなかった。あるときうちのソーシャルワーカーが、彼には家族がいたと福祉事務所から聞き、一緒に山梨県に家族を探しに行きました。なんとか探し当てて会えたんです。それから中野さんは態度がくるっと変わって、毎日を楽しみ始めた。

スタッフに恩返しがしたいと、毎週のように創作料理を食べさせてくれたりもしました。

いよいよその時が来たというとき、僕は救急車を呼びました。うちには人工呼吸器などの機器がないので、呼吸苦で死なせるのはあまりにも酷だと思ったわけです。救急車が出る前に、「病院に行ったらいろいろと処置がされて、きぼうのいえで死ぬことはできなくなるけれど、いいね？」と確認しました。すると彼は、「きぼうのいえに帰ります。降ります」って言ったの。どんなに苦しくとも「きぼうのいえ」で死ぬんだ、という強い意志を感じました。結局その日の朝方、妻子が見守る中で彼は亡くなりました。家族に見送られ、自分がもう一度生きようと思った場所で死ぬことができた。そういう意味では、彼は幸せだったのではないでしょうか。

毎日怒鳴っていた人が、「すべての人に感謝です！」と言って旅立ったり、「私にはもう満足だ！ こんなにあんたたちから愛されていることが分かったから、もういつ死んでもいいよ」と口癖のように言っていたおばあちゃんもいます。そうやって、「これでよし」と自分の人生に納得して死んでいくとき、その人は、自

分らしく今生を十分に生き切ったと言えるのだと思います。

すべての物事に 「もう一人の自分」を見る

一人称は私、二人称があなただとすると、三人称はその他の人々や、家族、地域、社会などの枠組みとの関わりを指すのでしよう。三人称的に言うのと、見ず知らずの人の死は、データ上の死という他人事に見えます。僕はそれが嫌だった。いま、目の前にいる知らないおじさんの身に起きていることがもしも自分の身に起きたら……と考えると、おじさんとはや関係のない他人ではないはず。僕は、「三人称の世界を、「私」と「あなた」よりももっと近い、一・五人称とも言える「もう一人の自分」となるくらいにまで引き寄せたい。そういう気持ちで入居者の人たちと接することが大事だと思っています。

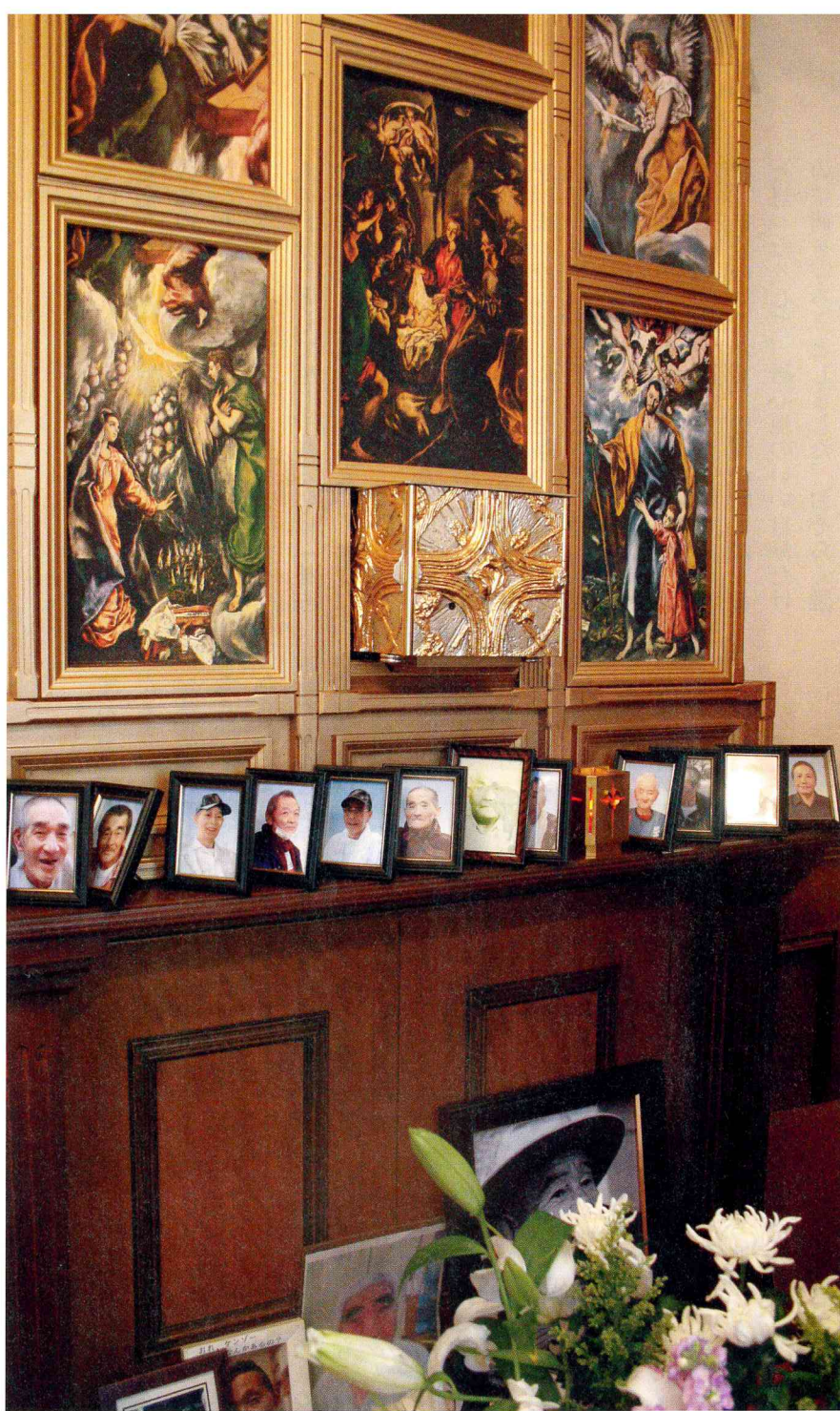
実を言うと、僕は昨年離婚しました。元奥さんはここを一緒に立ち上げ、公私共に最高のパートナーでしたが、いつの間にか二人の歯車がずれていたのでしょうね。ある日突然、別の男性と出て行ってしまった。もうショックが大き過ぎて、

僕は酒を浴びるように飲んで病院に担ぎ込まれました。でも、マイナス面ばかりでもなかったな、と感じているんです。

山谷のおじさんたちには、僕ら夫婦は「俺たちとは関係のない幸せな人たちだ」というふうに映っていたようでした。別に敵対していたわけじゃないけれど、

どこかに隔たりがあった。ところが奥さんが消えてから、彼らの僕を見る目が変わったのです。いきなり握手をしてきて、「一緒に頑張りましょう」とか「人生フアイト」なんて言ってくる（笑）。仲間として受け入れられたんだと、妙に納得しました。

十九世紀の中頃に、ハワイのモロカイ島で、ハンセン病患者のケアに生涯を捧げたダミアン神父の言葉を思い出したんですよ。ダミアン神父は、患者たちの生活環境を改善するなど懸命に奉仕したものの、患者ではない自分は部外者に過ぎず、心を通わせることができないと悩ん



でいました。だから自身もハンセン病を発症したとき、「神様、ようやく私はこの島の人たちと本当の友だちになれました」と神に感謝したというんですね。彼はようやく心の底から、患者を「もう一人の自分」として感じ、あるいは「彼の分身」として自分がいるという感覚になれたというわけです。

僕はこのような、三人称から一・五人称への感覚を追求していくことが、阪神淡路大震災や東日本大震災で苦難や悲惨を背負った人々との絆を築いていくことになるのだろうと考えています。

また、僕にはセルフイメージが広がっているような感覚もあるんです。子ども頃は、個室を与えられて喜んだものです。自分の城だから、母親が勝手に入ると怒ったりして、居心地のいい自分だけの空間を守ろうとしました。おそらく誰もが似たような経験をしているのではないでしょうか。ところが結婚当時は、自分の部屋がありませんでした。「きぼうのいえ」でも、いつも誰かが傍にいます。でも、不自由やストレスを感じなかったんですよ。「きぼうのいえ」全体が僕の部屋になっていて、おいでおいでってみんなを招き入れている感じなんです。

大人になるまでは、自分と他人を区別

することで自分の存在を確かめてきたのだらうけれど、いまは「きぼうのいえ」全体が僕自身と重なり、スタッフも入居者も、「もう一人の自分」として受け入れられるようになりました。そのイメージがもつと広がると、山谷の町から日本地球、宇宙へと繋がり、自分の内面にそれらが存在する感覚が芽生える。最終的には神様との出会いがあるのでしょうか。実存するすべてのものが一・五人称の関係性になっていく。そういう感覚がベースとなって、人間の命はどうあるべきか、死んだ後の世界はどうなっているのかという命の本質を考えるための視座が生まれていくのかもしれない。

ここは職場じゃない 自分を生きる場所なんだ！

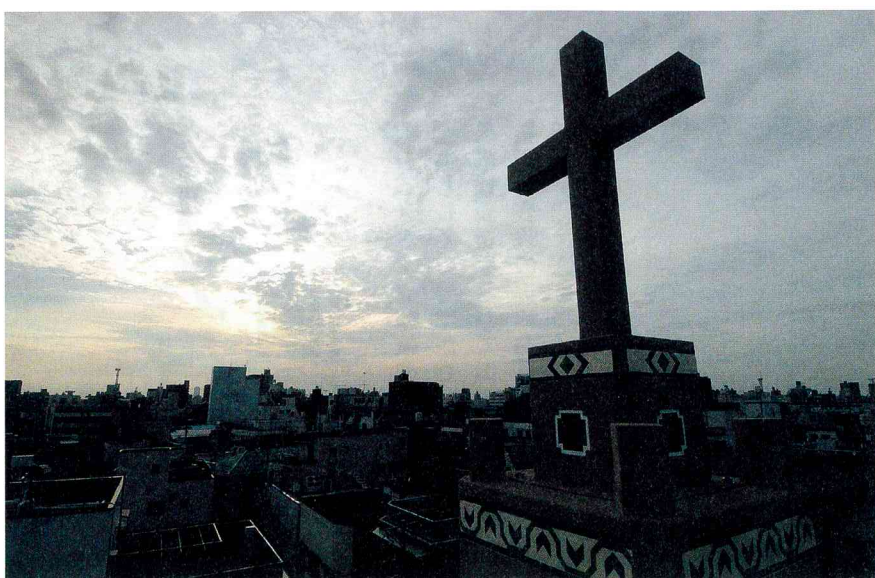
ここを始めた当初は、もう辞めてやる！と自暴自棄になったこともありました。まだスタッフも少ない中、「死んでやる！」と騒ぐ人をなだめたり、入居者があちこちからしていた借金の対応に追われたりするうちに、疲労とストレスが重なってうつ病を発症したこともあり、パニック障害にもなりました。でも、それらを超えて腹を決めたんです。

やっぱり苦しんでいる人たちに寄り添うことが僕の宿命なんだって。

なぜ人に寄り添おうとしてきたんだろうと考えてみると、理屈じゃないし、誰かを見て学んだのでもない。あえて言葉にすれば、観音様のお慈悲のようなものが自分の中にもあって、ある瞬間そこに火が点くような感覚なんです。気が付いたら、あの人の気持ちを何とか和らげたいなあなんて考えている。それで、スタッフに相談するわけです。

おそらく、「きぼうのいえ」では僕がいちばん弱いんじゃないかなあ（笑）。山谷におけるリーダーシップ、もしくはこれからの時代に必要なリーダーシップは、弱い人を中心としたものじゃないでしょうか。少なくとも僕の場合は、「山本さんここに乗りなよ」「ありがとう、じゃあお願い」と、みんなが担いでくれている神輿に乗せてもらって、今日まで来たような気がします。しかも、運んでくれるスタッフの多くは女性なんです。

僕は、女性たちの母性に大いに期待をしています。山谷を救うのは力や権力ではない、母性ですよ。山谷は昔と変わらず、闘いや恨みつらみ、憎しみが渦巻く町です。でもたったひとつだけ変わったことがある。何かというと、女性が町に



入ってきたこと。女性の母性が、おじさんたちの荒んだ心を和やかにしているのです。ドヤで暮らすおじさんたちが年老いてひとりじゃ生活できなくなった結果、男の町だった山谷に、ボランティアやヘルパーの女性たちが訪れ始めたのです。

うちの女性スタッフを見ていると、入居者の人たちを、上手に甘えさせてあげているなあと感じます。母性というものはおそらく、ものすごく懐の深い愛情なんでしょうね。そういえば男性スタッフも、どこことなく母性を感じるような人たちです。山谷全体に母性が行き渡れば、町の空気は確実に変わるはず。そのためにも僕は、「きぼうのいえ」の考え方を伝えるヘルパーステーションを作りました。現在は三十人以上のヘルパーさんが山谷で活動をしています。

以前うちを見学した人が、「山谷に新しくできた特別養護老人ホームは『戦艦』のように立派だけれども、きぼうのいえは、いまにも転覆しそうな『小船』のような存在である。しかし不思議なのは、きぼうのいえでは、スタッフが一体となって、荒波を乗り越えていこうとしているだけではなく、入居者までもがその中に混じりあって和ができていくことだ」といった内容をブログに書いていました。

おそらく、ここを単なる職場だと思っているスタッフは一人もいないでしょう。入居者の人たちにとってもスタッフにとっても、自分を生きる場所になっていると僕は信じています。

「きぼうのいえ」の「きぼう」は、命に対する希望です。この世の命のもっと先を含んだ、命全体に対する希望。スタッフも入居者もみんながそう思ってきたから、何とか続いてきたのかもしれない。経営的にはずっとギリギリの状況ですが、存亡の危機を感じたことはないんです。「きぼうのいえ」が危機を感じたらまずいです（笑）。それに、マイナスの考えはマイナスの状況を呼び込みます。ポジティブであれば、ポジティブなことが必ず起きる。自己啓発本に書いてありそうなことだけれど、本当にそうなんです。

今までだって、「何とかなる、大丈夫だ」と信じながらやるべきことを続けていると、手を差し伸べてくれる人が必ず現れた。何か大きな力が、転覆しそうな小船を守ってくれているような気がしてならないんです。そういう力を信じながら、『小船』は荒波を越えていく。なんてたって「きぼうのいえ」ですから。

